

造幣博物館ニュース

Mint Museum
News

Vol. 02
2025.11

造幣局と戦争Ⅱ－戦時下を生きた職員たち－



戦争の記録と
記憶



「造幣局と戦争 II　— 戦時下を生きた職員たち —」

令和7（2025）年7月19日（土）から9月15日（月・祝）まで、造幣博物館において、特別展「造幣局と戦争 II　— 戦時下を生きた職員たち —」を開催しました。

この展示では、太平洋戦争下の造幣局で働く職員の生活や業務がどのように変化したのか、さらに戦時の職員育成や太平洋戦争中に開設が決まった広島支局の原爆被害、大阪の本局と東京の支局における戦争被害などについて、これまで公開していない所蔵品や映像記録などを通じて紹介しました。

1. 紀元 2600 年

昭和15（1940）年は「紀元 2600 年」の年でした。紀元とは、初代天皇とされる神武天皇が即位した年を元年とする考え方で、昭和15年が即位から 2600 年目の年に当たることから、建国 2600 年を祝う奉祝行事（ほうしゅくぎょうじ：謹んでお祝いするための行事）が日本各地で催されました。

昭和15年11月10日には、宮城前広場（皇居外苑）で、昭和天皇と皇后が出席する内閣主催の「紀元 2600 年式典」が開催されました。式典には全国から 5 万人余りが参加し、造幣局からは、当時の造幣局長中村重喜を始め、10 名の職員も参列しました。さらに、式典の事務や要務に関与した者には、造幣局が製造した紀元 2600 年祝典記念章が授与されました（写真1）。

同じ日、造幣局庁舎4階の食堂でも紀元 2600 年記念式典が催され、多くの職員が参列しました。

また昭和15年10月25日には、甲子園南運動場に、2,600人の職員が参加した紀元 2600 年記念体育大会が開かれました。体育大会の様子は、写真と映像で記録されており、真剣に競技に取り組む職員の姿を見ることができます。

造幣局の記録映画が製作されたのも、この年のことです。「紀元 2600 年の造幣局」（全4巻）などの作品で、出勤風景や仕事の様子、退庁後の稽古事や 10 銭アルミ青銅貨幣の製造工程などが記録されました（写真2）。

しかし、祝賀ムードもつかの間、翌年の昭和16（1941）年12月に太平洋戦争が開戦し、日本は戦争の時代に突入していきます。



写真1：紀元 2600 年祝典記念章
(アルミニウム青銅製: 30.38mm-13.02g)



写真2：記録映画「紀元二千六百年の造幣局」

2. 出征する職員

戦争の激化に伴い、造幣局の職員の多くが出征していました（写真3）。

造幣局で発行されていた職員向けの局内報である『時報』には、戦地に赴く職員や戦地で亡くなった職員を紹介する記事が増えています。

また、戦地で慰問袋（いもんぶくろ）を受け取った職員が、袋の中に『時報』が入っているのを見つけ、うれしかった、と記した文章が残っています。

当時の在職職員の人数が記された「勤怠調」には、昭和19（1944）年9月1日の記録として、在籍している男性職員 2,020 名の内、応召（おうしょう：召集され軍務に就く



写真3：出征する職員

こと）者は 338 名と記されており、昭和 20（1945）年 2 月 1 日の記録には、在籍している男性職員 1,793 名の内、応召者が 447 名と記されています。これらの資料から、造幣局に在籍する多くの男性職員が、軍務に就いていたことが分かります。

職員の出征により深刻な労働者不足に陥っていた造幣局にとって、人材確保は大きな問題となりました。昭和 18（1943）年に造幣局の労務係が作成した「労働配置ニ関スル綴」には、局内の様々な部署から、職員の補充を求める声が届いていたことが記されています。「解傭、応召、長期欠勤者補填ノ為」に男性 25 名、女性 5 名の職員を新たに補充して欲しい、という要望を出している課もあり、特に男性職員の不足は深刻な問題となっていました。

3. 金属類回収令と造幣局の仕事

日中戦争の拡大に伴い、昭和 13（1938）年以降、金を政府へ献納・売却する運動が始まりました。集まった金は、造幣局の大坂本局と東京出張所に加えて、新たに開設された札幌・秋田・熊本出張所において、分析・精製されました。



写真4：回収貨幣の選別作業を行う桜宮高等女学校の生徒



写真5：勤労奉仕の学生の集合写真

昭和 16（1941）年 8 月、金属類回収令が制定されました。この法令は、武器の製造に必要な金属資源の不足を補うことを目的に制定されたもので、回収対象の金属類には、貨幣も含まれていました。回収された貨幣は造幣局に集められ、職員による選別作業が行われました。本局では、昭和 18（1943）年に勤労奉仕として桜宮高等女学校の生徒を受け入れていたことから、女学校の生徒達が選別作業を行う様子を撮影した写真も残されています（写真 4・5）。

戦時下的日本では、原料が不足したことにより、多くの男性が戦地に向かったことで、軍需品生産工場での業務を担う人員も減少していました。政府は、不要不急の工業に従事する工場を兵器工場に転用する方針を打ち出し、造幣局も昭和 19（1944）年から軍需品等の製造に携わることになりました。

この頃造幣局では、海上封鎖により錫の供給が不十分になってしまったことで、10 銭と 5 銭の錫貨幣の製造を打ち切り、1 銭錫亜鉛貨幣のみを製造していました。

使用することができなくなった貨幣製造機械のうち、溶解（ようかい）、圧延（あつえん）、圧穿（あっせん）作業に用いる設備は、海軍艦政本部の依頼により銅及び銅合金（丹銅、黄銅）を用いた砲弾部分品の製造に使われました。また、軍需省航空兵器総局の依頼により、航空機点火栓用ニッケル板の製造も行いました。

東京支局でも、圧印機を使って電波兵器（電波探信儀、レーダーのこと）部分品の型打作業の試験を行い、広島支局の五日市工場では、穿孔（せんこう）機を使って、呉海軍工廠から依頼された航空機部分品の加工作業の準備を行いました。作業途中に終戦を迎えたため完成品は製造できませんでしたが、大阪本局だけでなく、支局でも軍需品の製造に携わっていたのです。

また、従軍記章の製造も戦中の造幣局が行った業務の一



写真6：昭和六年乃至九年従軍記章（青銅製: 30.14mm-29.72g）



写真7：支那事変従軍記章（青銅製: 30.01mm-26.92g）

つです。従軍記章とは、戦役や事変に従軍した者に授与されたもので、明治7（1874）年の台湾出兵の際に授与されたものから、昭和19（1944）年の大東亜戦争従軍記章まで、9種類の記章が造幣局で製造されました（写真6・7）。

4. 戦時下の職員育成

日中戦争の開戦以降、応召者と軍需産業に従事する労働者が増加したことにより、造幣局は深刻な労働力不足に陥りました。

造幣局では新たに採用した職員に貨幣製造業務を教育する目的で、昭和14（1939）年6月に見習工養成所を設置。ここでは、満17歳未満の男子見習工に6か月間の教育で技術を身に付けるカリキュラムが組まれ、1日8時間の授業が行われました。

昭和15（1940）年には、造幣局で働く16歳以上の男子工員が入学できる工手養成所も設置しました。3年間で化学科や機械科などの課程に加えて軍事教練の授業も受け、授業以外の時間は所属する職場で勤務することで、造幣局の将来を担う職員を育てることを目的としていました。

見習工養成所と工手養成所は、昭和16（1941）年4月に造幣局青年練成所となり、本科5年と研究科1年の学校として、就業時間の一部を割いて授業が行われました。14歳以上19歳未満の男子職員のうち、中等学校以上の教育や青年学校の教育を受けていない者は全員、青年練成所に入所し軍事教練を受けました（写真8）。

昭和18（1943）年6月、全国で一斉に「安全週間」が実施されました。造幣局では、安全週間行事の一つとして



写真8：青年練成所の授業風景



写真9・10：安全ポスター

全局員から安全ポスターの募集を行い、100点の応募作の中から1～3等の作品が選ばれました。この時選ばれた入選作品は、現在も造幣局に残されています（写真9・10）。

安全に気を配り、工場での災害を減らすことも、戦時下における職員育成の大重要な取り組みであったことがうかがえるとともに、当時の世相がひしひしと伝わる資料となっています。

5. 陶貨幣の製造

前号でも触ましたが、令和5（2023）年、京都市東山区の歯科材料メーカー・株式会社松風の敷地内に建っていた古い倉庫の中から、かつて造幣局京都出張所であった松風工業株式会社（昭和42（1967）年に解散）が製造していた1銭陶貨幣が大量に見つかりました。令和6（2024）年9月に造幣局に引き渡された陶貨幣は、木箱13箱、コンテナ2箱の計15箱にものぼります。

各箱に収納されていた布袋や麻袋の数などの状況から、引き取った当初から陶貨幣の総数は50万枚を超える程度と推定していましたが、各箱の実重量（平均45kg）を計測した結果、現時点では70万枚以上になるものと推測しています。

① 小袋に入っている陶貨幣の枚数

陶貨幣は小袋に入っている状態のものがあり、袋には「一銭臨時貨幣 貳拾円 造幣局」の印が押され、「良品2000」といった紙製証票が、袋の口をしばっているひもで結わえられています。

このうち、「木箱No.13」とした木箱から小袋を4点取り出し、枚数を調査したところ、それぞれの小袋には1,967枚、1,948枚、1,995枚、2,011枚の1銭陶貨幣が入っており、過不足なく2千枚ちょうどの貨幣が入っている小袋はありませんでした。

現在の造幣局において、日本銀行に納める貨幣の枚数に過不足が生じることはあってはならないことから、この結果は驚きでした。

② 陶貨幣の品質

「木箱No.04」と「木箱No.13」に入っていた良品を示す証票のついた小袋各1袋の陶貨幣について、全数（それぞれ2,006枚及び1,967枚）を計測した結果、貨幣の直径と量目（重さ）が、造幣局が定めた公差基準を満たしているものは、「木箱No.04」では70枚、「木箱No.13」では16枚でした。

公差とは、良品・不良品を区別するための品質基準の一つで、1銭陶貨幣の場合、規定の直径15mmに対して工業公差は±0.15mm、規定の量目0.8gに対して100枚あたりの集合公差は±5.6g（1枚当たり0.056g）とされていました。

公差に収まる「良品」の割合が少なかったことから、陶貨幣の製造は、量の確保を優先し、十分な検査が行われることなく納品を進めていたものと考えられます（写真11）。



写真11：調査で見つかったいろいろな状態の陶貨幣

6. 広島支局の開設と原爆被害

昭和15（1940）年以降、東南アジア地域に進出した日本は、「大東亜共栄圏」構想のもと、これらの地域で使用する貨幣をすべて日本で製造する計画を立て、昭和17（1942）年7月に、新たな造幣工場の設置を決定しました。

大阪、兵庫、岡山、広島の20数か所の候補地の中から、交通・電力・用水の利便性があり、地元からの積極的誘致があった広島県佐伯郡五日市町（現在の広島市佐伯区五日市）に決定、昭和18（1943）年から建設工事が始まりました。

建設予定地の大部分は「悪泥（おどろ）」と呼ばれる湿地帯で、土砂を運搬して盛土をする必要があったことから、工事の着工が遅れていきました。さらに、戦況の悪化と共に鉄鋼や木材、セメントなどの建設資材の入手が困難になり、広島支局の建設工事は進みませんでした。

そこで、建設途中の広島支局は本局と東京支局の設備の疎開先に充てられることになり、昭和20（1945）年2月1日に未完成のまま造幣局広島支局が開設されました。昭和18年7月に買収し、職員の詰所としていた広島市打越町の合資会社三篠（みささ）鉄工所を、造幣局広島支局の仮工場（横川分工場）とし、本局から供給を受けた円形（えんぎょう：貨幣の形に打ち抜いた金属の板のこと）と圧印機6台を使って、1銭錫亜鉛貨幣の製造を開始することになりました（写真12・13）。

また貨幣製造以外の業務を行う場所として、昭和20年3月に広島市八丁堀の金正堂書店の2階に、広島支局仮事務所を設置しました。

ところが、本土空襲の激化に伴い、昭和20年6月には本局からの円形の供給が途絶え、貨幣製造業務は停止に追い込まれます。五日市町に建設中の広島支局は、呉海軍工廠管轄の新興ゴム工場の疎開工場となり、仮事務所は、昭



写真12：広島支局仮工場（横川分工場）で行われた打初め式で撮影された写真



写真13：昭和20年銘 1銭錫亜鉛貨幣 15mm-1.3g

和20年7月に金正堂書店から紙屋町の住友銀行広島支店4階に移転しました。

昭和20年8月6日、原爆の投下により仮工場は破壊され、爆心地から260mの場所にあった仮事務所は焼失しました。当時の広島支局職員約100名のうち、原爆投下による職員の死者は8名、負傷者は70名以上にのぼりました。出勤中に原爆が投下され、行方不明になり遺体も見つからなかった職員や、倒壊した工場の下敷きとなり即死した職員、原爆の被害に遭いながらも宿舎に戻り、亡くなった



図1：原子爆弾被災状況を示す広島市街図 提供：広島平和文化センター（『広島原爆戦災』第一巻 原子爆弾被災状況広島市街説明図を基に作成）

職員もいたと言われています（図1、写真14）。

昭和30年代に入ると、日本の経済成長と国民所得の増加、自動販売機や公衆電話の普及、スーパーマーケットの開店などにより貨幣需要が増大します。造幣局では製造設備の拡充に着手し、広島支局に新機械の導入や設備配置の合理化を行い、工場を全面的に改築しました。これにより、近代的な設備を持つ工場に生まれ変わり、貨幣製造能力は倍増しました。

現在、貨幣製造工程の中で溶解と圧延工程を行っているのは、広島支局の工場のみです。原爆の被害を受け、一時は存続も危ぶまれた広島支局は今年開設80年を迎え、日本で唯一の貨幣一貫製造ラインを持つ貨幣工場として、今も稼働しています。



写真14：広島支局仮工場で使用されていた圧印機6台のうちの1台。原爆投下により被爆したが、修理され昭和49（1974）年まで広島支局内の工場で使用された。

7. 造幣局と戦争、そして戦後の復興へ

昭和17（1942）年4月18日午後12時半頃、東京に初めての空襲がありました。この日、造幣局では桜の通り抜けが行われていましたが中止され、再開するのは5年後の昭和22（1947）年4月のことになります。

昭和19（1944）年になると日本の都市部への空襲が始まり、昭和20（1945）年、大阪にある本局と、東京支局は大きな被害を受けます。

大阪本局への空襲は、昭和20年1月30日、6月7日、6月15日にあり、職員が住む官舎や局内の工場、病院、青年練成所、局長官舎などが焼失。5名の職員が亡くなり、桜の木も約300本が焼失したと記録されています（図2）。

東京支局への空襲は、昭和20年4月13日から14日にかけて発生し、工場や官舎など施設の約7割が焼失しました。昭和20年8月11日には、九州の久留米出張所も空襲の被害を受け、倉庫や家屋などが焼失しました。

昭和20年8月15日、太平洋戦争終結の後、造幣局本局を連合軍の駐留部隊が接收しました。連合軍は、日本政府の保有する金、銀、白金などの貴金属類を接收し、造幣局本局の地下金庫に保管。本局には、昭和20年10月から5年間に渡り、連合国軍の将兵10数名が駐留しました。

終戦後は、連合軍の指令により、通貨や切手に皇室や軍国主義的な図案を使用することが禁じられました。戦後の造幣局の貨幣製造は、1銭錫亜鉛貨幣の製造から再開しましたが、「大日本」の文字が入ったままであったことから、1か月程度で打ち切られました。

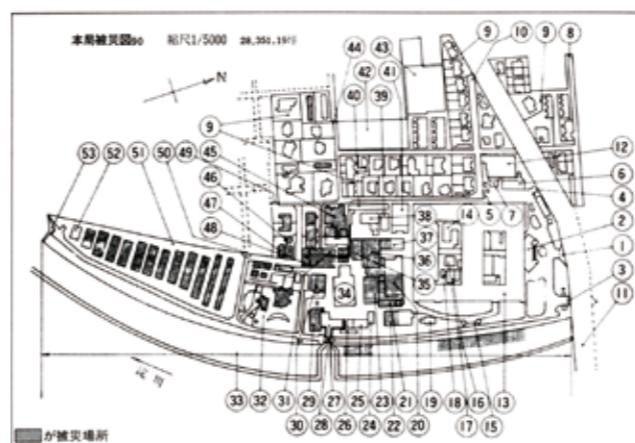


図2：大阪本局の戦争被害図（『造幣125年のあゆみ』を元に作成）

その後、昭和21（1946）年1月に10銭アルミニウム貨幣、5銭錫貨幣の製造が始まります。新しい貨幣は、国名表記が「大日本」から「日本政府」に変更され、稻穂や鳩などの図柄が刻まれました。さらに8月から製造が始まつた50銭黄銅貨幣には、鍔（くわ）、つるはし、稻、麦、魚、歯車が描かれた、産業立国を表した図柄が刻まれ、材料には、薬莢（やっきょう）や弾帯などの銅合金系統のスクラップが使われました（写真15～17）。

昭和21年9月21日、造幣局内の食堂で、昭和18（1943）年10月から昭和21年7月の間に亡くなった職員を追悼する慰靈祭が行われました。戦死者や公務中に死亡した者、殉職した者など、この3年間に亡くなった人数は100名を超えていました（写真18）。

戦地で、原爆で、空襲で、多くの職員を亡くしたことは、造幣局にとって大きな痛手でしたが、生き残った職員の手

1 正門	18 溶解電気室	35 旋盤・仕上新工場
2 正門玄関	19 屋外変圧装置	36 旋盤・仕上旧工場
3 北門	20 熱間圧延工場	37 鋼工場
4 通用門（平常締切）	21 200馬力圧延機室	38 鋳物場
5 通用門	並びに煙突	39 淘汰場
6 車庫	汽罐並びに発電所	40 木型場
7 営繕係木工場	第三熟成課工場	41 製鍊係工場
8 一号門	24 ディーゼル機関室	42 貸渡地685 95坪
9 北宿舎	25 第二熟成課羽布室	43 貸渡地690 71坪
10 二号門	26 仮眠所	44 三号門
11 桜の宮橋	27 入堀	45 病院
12 用度係倉庫	28 眼鏡橋	46 クラブ、理髪所
13 庁舎並びに工場	29 青年練成所	47 共同浴場
地階・1階・2階	30 第二熟成課工場	48 売店
・3階	31 工作課倉庫	49 四号門
14 溶解淘汰場	32 局長官舎	50 西門
15 旧正門	33 引き通し長さ	51 南官舎
16 120馬力圧延機室	1786尺9寸2分	52 合宿所
17 中央送水室	34 修養道場（講堂）	53 南門

で金属貨幣を製造する業務を再開し、戦後の造幣局の日常が徐々に戻ってきました。



写真18：昭和21年9月21日に行われた慰靈祭の様子



写真15：昭和21年銘 50銭黄銅貨幣 23.5mm-4.5g



写真16：昭和21年銘 10銭アルミニウム貨幣 22mm-1.0g



写真17：昭和21年銘 5銭錫貨幣 17mm-2.0g

参考文献

吉田裕『日本軍兵士－アジア・太平洋戦争の現実』中央公論社 2024年 戦時下勤労動員少女の会（編）『[改訂版] 記録－少女たちの勤労動員－女子学徒・挺身隊勤労動員の実態』西田書店 2013年

藤井明『明治・大正・昭和メダル全史』国書刊行会 2024年

杉田芳郎『今次大戦末期における陶貨の製造』（『窯業協会誌』64巻724号 1956年）

有田町史編集委員会（編）『有田町史 陶業編II』有田町 1985年

瀬戸市歴史民俗資料館（編）『企画展（代用品）としてのやきもの』瀬戸市歴史民俗資料館 2001年

瀬戸市史編集委員会『瀬戸市史 通史編下』愛知県瀬戸市 2010年

五日市町誌編集委員会（編）『五日市町誌 中巻』五日市町誌編集委員会事務局 1979年

日本の空襲編集委員会（編）『日本の空襲一五』『日本の空襲一六』『日本の空襲一八』三省堂 1980年

※造幣局の歴史に関する記述は、下記の文献を参照して作成しています。
造幣局（編）『造幣局70年史』造幣局 1942年

大蔵省造幣局（編）『造幣局80年史』大蔵省造幣局 1958年

大蔵省造幣局（編）『造幣局百年史』大蔵省造幣局 1974年

大蔵省造幣局（編）『造幣局百年史 資料編』大蔵省造幣局 1974年

造幣局150年史編集委員会（編）『造幣局150年のあゆみ』独立行政法人造幣局 2022年

今回掲載している貨幣等の資料の詳細については、造幣局ホームページ内に掲載しております展示品リストをご参照ください。

https://www.mint.go.jp/enjoy/special-exhibition/special-exhibition-etc/enjoy-event-plant_special_250710.html

次回特別展のご案内



令和七年度 造幣博物館 後期特別展

手のひらサイズの芸術品

コレクターコインの世界

開催日程

2025年11月15日(土)~2026年2月15日(日)

造幣博物館が所蔵する、近年、国内外で製造されたコレクターコインを50点以上紹介します。展示するのは、有名なキャラクターや名所、見せ方を工夫したもの、新奇の技術を加えたものなど、様々なコインです。

どれも手のひらサイズの小さなですが、そこに施された技をお楽しみください。



「造幣博物館ニュース」第2号をお届けします。

第2号では、平成7年7月から9月に開催した特別展「造幣局と戦争Ⅱ」の内容をお伝えしています。

この特別展では、戦時下の造幣局で働いていた職員たちにスポットを当てています。以前、局内にあった防空壕や勤労奉仕の学生達を撮影した写真を見る機会があり、いつか戦時下の造幣局で働いていた人たちのことを紹介したい、と思ったことが、この企画につながりました。

今回の展示では、戦時に撮影された写真と共に、従軍記章や昭和18年に製作された安全ポスターなど、これまで展示する機会がなかった資料も多く紹介しました。「造幣局と戦争」展はこれで終了ですが、機会があれば第3弾も企画したいと思います。

第2号の表紙は、出征する職員を撮影した写真です。撮

影されたのは、現在も使われている造幣局庁舎の正面玄関です。出征する職員と見送る職員が写っていますが、撮影日も、写っている職員の名前も伝わっていません。出征する職員を写した写真は、他にも何点か残っていますが、いずれも写っている人の名前は不明です。造幣局から多くの職員が戦地に向かったことを伝える1枚だと思い、表紙に選びました。

戦後80年を迎えて、戦争を経験していない世代が増えている中で、本展が、皆さんにとって戦争の記録と記憶をつなぐものとなりますように、と願っています。

さて、次回の特別展は「手のひらサイズの芸術品—コレクターコインの世界—」です。造幣博物館が所蔵する国内外のコインをたくさん展示する予定で、現在準備の真っ最中です。楽しみにお待ちください！

(学芸員 澤崎瞳)

造幣博物館

入館料無料

開館時間 9:00~16:45(入館は16:00まで)

休館日 毎週水曜日、年末年始(12/28~1/4)、「桜の通り抜け」開催期間
※特別展期間中の土曜・日曜・祝日も開館

アクセス 京阪電鉄・大阪メトロ谷町線「天満橋駅」徒歩約15分
大阪メトロ堺筋線・谷町線「南森町駅」徒歩約15分
JR東西線「大阪天満宮駅」徒歩約15分
JR環状線「桜ノ宮駅」徒歩約15分
◎ご来館にあたっては公共交通機関をご利用ください。

お問い合わせ先 TEL:06-6351-8509(直通)
独立行政法人造幣局 造幣博物館
大阪市北区天満1-1-79

博物館へは、造幣局正門入口よりご入館ください

